

どうにか、ならなかったの?!このふたり!

素朴な庶民生活の描写を目指す小説に与えられるポピュリスト賞を獲得した、セルジュ・グルッサールのベストセラー小説『しがない人々』を原作に、アンリ・ヴェルヌイユ監督が1955年に製作したこの作品は、フランス本国はもちろん、情緒的なストーリーを好む日本の観客にも大きな共感を呼びました。作家の藤本義一氏が『私を射抜いたヘッドライト』と題して、人生を変えた名画だったと激賞しています(文芸春秋・2009年季刊夏号)。

公開当時高校生だった私自身は、“タイプの映画ではない”と観客にはなりませんでしたが、ラジオのリクエストでしばらく上位を占めたこの映画のテーマ曲は大好きで、口笛で随分練習した記憶があります。今回、初めて図書館で借りて見ましたが、記憶に残る一本になりそうです。

映画の第一印象は、「どうにか、ならなかったの?!このふたり!」。クロチルドがあまりに哀れで、なんともやるせない気持ちになりました。「どうにかならなかったら映画にならなんでしょう。ならなかったからこそ、空しいんでしょう。切ないんでしょう。『味』があるんでしょう……」と、誰かが書いていました。

気を取り直して、二度目に丁寧にみると、少し視点と印象が変わってきました。ストーリーとしては、もちろんジャンとクロチルドの哀切極まりない恋が中心に置かれてはいるのだけれど、同時に、それを取り巻く状況が丹念に描かれていることに気が付き、その中に救いをみつけることができました。

ジャンの妻も子どもたちも、クロチルドの母親も墮胎をすすめた女主人も、底にかすかな温かみと誠実さを感じられるように、監督は周到に信号を送っているような気がしてきました。運送業舞踏会の席上で妻がジャンをダンスに誘う場面で、女優志望の反抗的な娘が、家庭を捨ててクロと生きる決心を固めたジャンを、謝りながら引き留めようとするシーンなど……。

この作品が製作された1955年頃は、既成の価値観の転換を叫び、フランス映画の概念を塗り替えた新しい表現“ヌーヴェル・ヴァーグ(新しい波)”が登場する、まさに前夜でした。新聞記者出身で、当時35歳の新進監督ヴェルヌイユは、当然そのことを強

く認識していたに違いありません。彼は貧しい庶民の生活を、誠実に暖かく描く伝統的なフランス映画の流れを汲みつつも、しがない二人の哀切極まりない恋を厳しく描き切ることで、“古きよき”フランス映画の挽歌としてこの作品を送り出したのではないかと、という気がします。

半世紀以上前、私も口笛で一生懸命練習したこの作品のテーマ曲の作曲は、ジョセフ・コスマ。彼は『枯葉』『ロマンス』のほか、多数のシャンソンの作品で有名ですが、映画音楽でもマルセル・カルネの『天井桟敷の人々』、『愛人ジュリエット』、ジャン・ルノアールの『大いなる幻想』、『恋多き女』など、27本の映画音楽を手掛けています。恐らくその中で最も有名なのが、本作品の主題歌でしょう。ちなみに、咽び泣くような美しい旋律を生み出している楽器は、真空管の発信音を利用して音を出す「オンド・マルトノ」という電子楽器だそうです。

この作品の後、ヌーヴェル・ヴァーグの激しい嵐の中に落ち込んで、目立たない存在だったヴェルヌイユ監督でしたが、1963年、ジャン・ギャバンとアラン・ドロンを起用したフィルム・ノワール史に残る名作『地下室のメロディー』で、ゴールデン・グローブ外国映画賞を受賞しています。この作品は、シネマ・ド・リぶらで、2年前に第7回上映会で上映しました。K.M.

上映時間についてのご案内

好評につき、今後、午前10時からと午後2時からの2回上映になりました。ご都合のよい時間にご来場下さい。

図書館のテーマ展示についてのご案内

展示期間は2週間を予定しておりますが、展示用の図書がなくなり次第、展示を終了させていただきます。終了後は、予約システムをご利用下さい。

2012.10.18
vol.20

『ヘッドライト』

シネマ・ド・リぶらの
コラム・ド・シネマ

「人間への一番すばらしい贈り物は、感動である」

これは、映画『ヘッドライト』の中で、大衆食堂のウエイトレス「クロチルド」を演じたフランソワーズ・アルヌールが、自伝『映画が神話だった時代』の序文で述べた言葉である。

映画を観て感動すること、これが私にとって映画を見る最大の目的であり、贈り物でもあります。それは、感動を受けることによって自分の感受性の減退を防ぎ、いつまでも若い感性を持ち続けることができると思うからです。今日もこの映画「ヘッドライト」で、ジャン・ギャバンとアルヌールから感動を受けたいと思います。

この映画の見所は、深夜の国道を走る長距離トラックの中で、ジャンとクロの顔がヘッドライトに照らされる陰影と、バックに流れる主題曲のしのび泣くような美しい旋律が、二人の行く末を暗示しているところです。

また、自伝のエピローグでは、「人生のすばらしさとは、不幸な出来ごとに苦しんでも、喜びがまためぐってくることであり」と結んでいます。 au

ジャン・ギャバンの演技に魅せられて

この映画は1955年(昭和30年)製作のフランス映画で、ジャン・ギャバンの寡黙な演技と、フランソワーズ・アルヌールのあふれる愛嬌と哀しげな演技で忘れられない映画である。

長距離トラックの運転手ジャン(ジャン・ギャバン)

は、主要な街道から離れた田舎道にポツンと立つ寂れたドライブ・イン風の居酒屋「ラ・キャラバン」へ。乾いた風が土ぼこりを上げる道に一台の古ぼけたトラックが停まり、運転手のジャンが疲れきった表情で降りてくる冒頭シーンが素晴らしい。

パリ～ボルドー間1,500kmの長距離で思い出したのが、現在上映中の日本映画『あなたへ』であった。これは、富山刑務所の指導技官(高倉健)が、亡き妻(田中裕子)が手紙で遺した「故郷の海を訪れ散骨して欲しい」という想いを遂げるために、長崎県までの道中のエピソードである。その間の距離が1,200kmだが、移動手段は改造したキャンピングカーである。それに比べ『ヘッドライト』のトラックは、ラジエターの故障を始め、気苦労いっぱいのトラックでの長距離である。霧の中で立ち往生したトラックの中の家畜たちの声がジャンの肉体的疲労にかぶり、シーンを盛り上げている。

ジャン・ギャバンは1904年5月17日出生、1976年11月15日(72歳)没のフランス映画俳優であり、歌手としても活躍した。完全な二枚目ではないが、一癖も二癖もあるならず者やお尋ね者を得意としてギャング映画に数多く出演し、深みのある演技と渋い容顔で絶大な人気を得た。私の印象に残っている映画は、『望郷』(1937年)『現金に手を出すな』(1954)『地下室のメロディー』(1962年)『暗黒街のふたり』(1973年)である。 S. N

『ヘッドライト』
フィルムデータ

原 題：Des Gens sans
Importance
製作年：1955年
制作国：フランス
上映時間：101分 モノクロ

監督：アンリ・ヴェルヌイユ
脚本：アドルフ・グリーン、アンリ・ヴェルヌイユ
音楽：ジョセフ・コスマ
出演：ジャン・ギャバン、フランソワーズ・アルヌール、
ピエール・モンディ、ポール・フランクール

りぶらサポータープロジェクト 「シネマ・ド・りぶら」
『ヘッドライト』 関連図書案内
& DVD

俳優



N 778.2 植草 甚一 晶文社
『ぼくの大好きな俳優たち』



N778.2 山田宏一 幻戯書房
『映画の夢、夢のスター』



N 778.2 児玉数夫 新書館
『懐かしの映画女優 101』

N778.2 児玉 夫 右文書院
『私の映画日記 別巻2
懐かしのヨーロッパ映画』

N 778.2 毎日新聞社
『20 世紀の大スター 100 選』

N 778.2 近代映画社
『20 世紀のグレートスター
100 & 外国映画』

N 778.2 佐藤忠男 晶文社
『映画俳優』



N 778.2 山崎剛太郎 春秋社
『一秒四文字の決断
—セリフから覗くフランス映画—』



N 778.0 高三啓輔 白水社
『字幕の名工
秘田余四郎とフランス映画』



I 778.2 双葉十三郎 文芸春秋
『愛をめぐる洋画ぼくの500本 (文春新書)』

N 778.0 「愛の言葉」選定委員会 日経BP社
『読んではいけないオトコとオンナ
愛の言葉—101の映画名セリフから—』

N 778.2 山田宏一 新書館
『恋の映画誌』



フランス映画

N 778.2 本吉瑠璃夫 文芸社
『古き良き時代の外国映画』

N 778.0 和田 誠 新書館
『シネマ今昔問答 望郷篇』

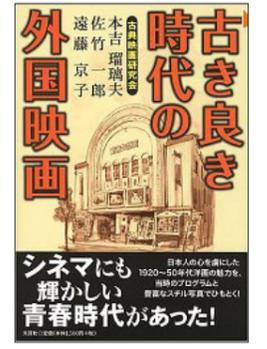
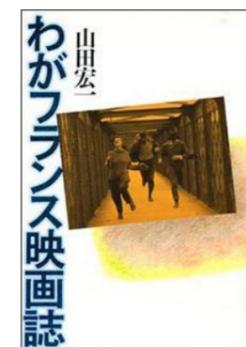
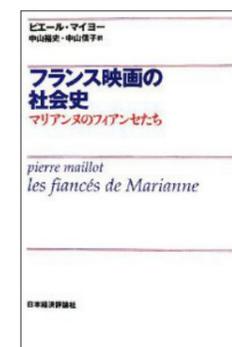
N 778.2 植草甚一 晶文社
『シネマディクトJの映画散歩
フランス編』

778 朝日新聞社
『映画100年STORYまるかじり
フランス篇 フランス映画快作22』

778 山田宏一 平凡社
『わがフランス映画誌』

I 778.2 中条省平 集英社
『フランス映画史の誘惑』

N 778.2 ピエール・マイヨー 日本経済評論社
『フランス映画の社会史
—マリアンヌのフィアンセたち—』



字幕

恋・愛